飼育レポート

report 01 ユキヒョウ「ヒカリ」の成長記録

飼育展示担当　佐々木 祐紀

ヒカリ（左）とアサヒ

ヒカリが展示場デビューする際に、展示場側面が崖のような作りになっていることや、展示場の中心にあるキャットタワーの一本橋が気がかりでした。ユキヒョウの子どもは身体能力が十分発達していないため、滑って落下する恐れがあるからです。

そこで、地元企業の（株）秋田プライウッド様のご協力により、落下時の衝撃を和らげてくれるウッドチップを展示場に敷き詰めることにしました。

9月7日、ヒカリを初めて展示場に出したところ、しばらく出入口でウッドチップをくわえて遊んでいましたが、1時間後には慣れた様子で展示場に出てきました。母親のアサヒはキャットタワーの上からヒカリを見守ったり、下に降りてヒカリの体を舐めたりと愛情が感じられました。ある日、高所にいるアサヒを見て、自分も岩を登ろうとチャレンジしましたが、滑り落ちて上手くいきませんでした。今度は、落下防止のため、上まで行けないように設置した金網に目を付け、よじ登ろうと何度もチャレンジしました。このまま金網を乗り越えて崖や一本橋まで登ってしまうと、いくらウッドチップを敷いたとはいえ落下が心配でした。翌日、金網を爪がかからない板に交換したところ、何度もチャレンジしましたが、登れないことがわかり、ひとまず諦めました。

ヒカリの展示場デビュー

ヒカリの身体能力が高くなってきた9月下旬、「岩を登りましたよ」とお客様からのお知らせがありました。岩を登る回数が増えてくると、乗り越え防止の板を撤去し、キャットタワー周辺も活動できるようにしました。初めて一本橋を渡ったときは、飼育員もお客様もハラハラしながら見守ったものです。夜間はさらに活発に行動するようになり、展示場を縦横無尽に走り回っています。最近では、アサヒの後を追いかけて走ることもあり、ヒカリの成長に感心しています。今後どのような姿を見せてくれるのか、楽しみでなりません。

report 02 フタコブラクダ「幸」と「福」の同居訓練

飼育展示担当　鈴木 昌典

導入直後の幸（左）と福

当初、2022年3月にオランダから搬入予定だったラクダは、世界的なコロナの影響により、同年8月のアメリカからの搬入に変更になりました。当初予定していたラクダは体の大きい個体だったので、今いる来来（ライライ）（メス）とは同居させず、交互に展示する計画でしたが、体の小さい福（オス）と幸（メス）なら同居ができると思い、3頭を同居する準備を進めました。

まずは、室内で顔合わせをするため、頭が出ないようにフェンスで仕切り、お見合いを始めました。お互いを確認したら、次は外でのお見合いです。外でのお見合い準備は外展示場内をパイプで仕切った区画に来来を入れ、福と幸は、通常の展示場に出す訓練を行いました。福と幸は来来に興味があるのか仕切りの周辺に行き、来来はやや距離を取っているものの同居に向けて悪い感触ではありませんでした。

次のステップはお互いのエサを少しずつ近くすることです。動物のトラブルはエサがらみが大半であることから、ここは慎重に時間をかけ近づけていきました。何日か試した後、大丈夫と判断して同居を開始しました。

何度か来来が2頭に対して威嚇行動を取るものの大きなトラブルはありませんでしたが、2022年暮れあたりから福が幸に対して攻撃するようになり、幸がエサを食べられない状態となったため現在は福を同居から外し、来来と幸の同居を実施しています。当初、順調に進んでいた3頭の同居を断念する結果となり改めて動物飼育の難しさを痛感しました。

春には成長した幸と福の元気な姿を皆さんに見ていただけるよう、2頭を見守っていきたいと思います。

11月の同居訓練の様子